

音楽教育における創造性と創作についての一考察：
凶形楽譜を用いての試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松下, 允彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008302

音楽教育における創造性と創作についての一考察

(図形楽譜を用いての試み)

A Study of Creativity and Creative Work in Musical Education

松 下 允 彦

Yoshihiko MATSUSHITA

(昭和59年10月11日受理)

I はじめに

昨今、創造性の教育の重要性はすでに広く論議され、多くの創造教育が行われている。そして、その創造教育の一つの方法として、音楽活動は「あそび」のように誰もが苦勞なく楽しんで行うものであるという考え方を基盤にした「教育的あそび」からのアプローチがある。

そこで、音楽教育に結びついたあそびである「教育的音楽あそび」を考察してきた結果、あそびと創造性は、非常に密接な関係にあることがわかってきた。音楽あそびをしていると、自然に音楽的創造性が養われるのである。つまり、それは、あそびに内在する心の解放、興味・関心、熱中といった作用が創造性の教育によい結果をもたらすからだと考えられる。^(註1)

しかし、こうした音楽的あそびを発展させていっても、最終的には「音楽的基礎能力」の前で行き詰まってしまう。仮に、創造しようとする意気込みがあっても、その表現のすべがわからないのである。しかし、音楽的創造性を高めるために、音楽的基礎能力が足りないなら足りないなりに、なお一層、音楽的自己表現を体験させ、創造の喜びを味わわせる必要があると考える。なぜなら、せっかく「あそび」によってみがかれた、自由で束縛されない発想を、表現できないからといって、うずもれさせてしまうにはあまりに惜しいことである。表現する手段を知らないために、自分の持つ創造力に気づかないでいることは残念でならない。子どもを音楽の知識や技術から解放し、子どもの持つ鋭い感覚をまず優先する方法を考え、与えることが重要である。

こうした考え方から、「感覚的な創作及び感覚的楽譜を可能にする図形楽譜」^(註2)と、「言葉としての意味はないが音楽的には十分な意味をもったシラブル」^(註3)との併用は、このような音楽創造の教育に効果をあげてきたことを報告してきた。

本論では、今までの実験に協力してきた子どもたちが、「大きな曲を作りたい」・「物語を作りたい」・「みんなで演奏したい」・「音楽に合わせて振り付けをしたい」・「照明を考えたい」といった具合に、自己表現の創意が盛り上がってきたあげく、あそびとしての余裕を持ちながらも、音楽創造だけにとどまらず、総合的な創造意欲へと発展した活動を扱った。

前半は小学校4年生の38名が、総意で「ぼくの住む湖」と題する物語を作り、それに音楽をつけて図形楽譜を作成し、皆で演奏した記録である。この一連の活動の中での個々の働きかけ、集団としての働きかけは、児童の創意をフルに発揮させている場面であるので、できるだけナ

マの声を記すようにした。後半は、その図形楽譜を、年代も環境も全くちがう大学生に与え、実際に演奏をさせてみた記録及び考察である。

II 図形楽譜

「ぼくの住む湖」

図 1

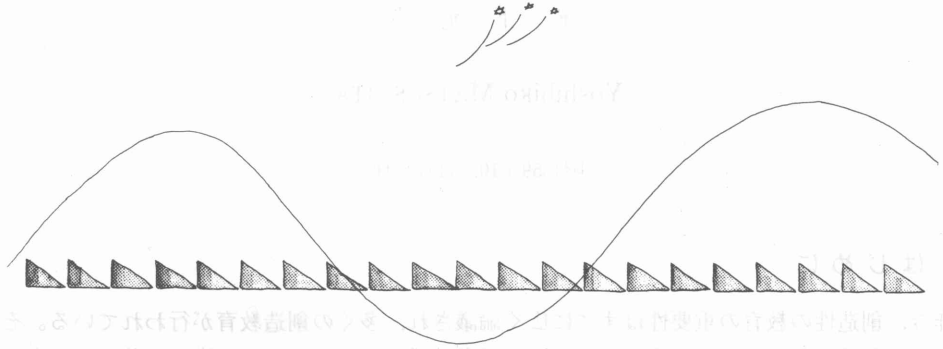


図 2

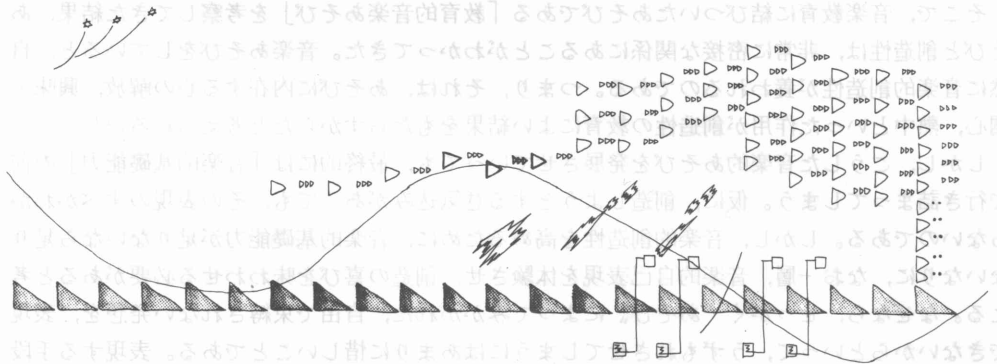


図 3

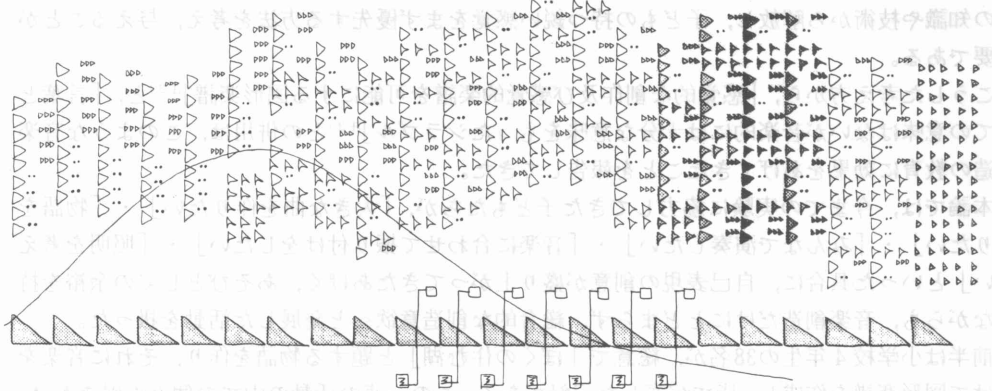


図 4

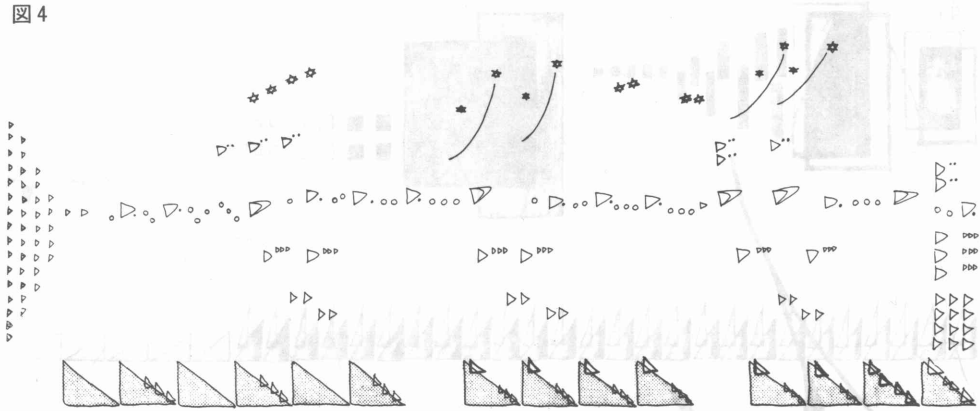


図 5

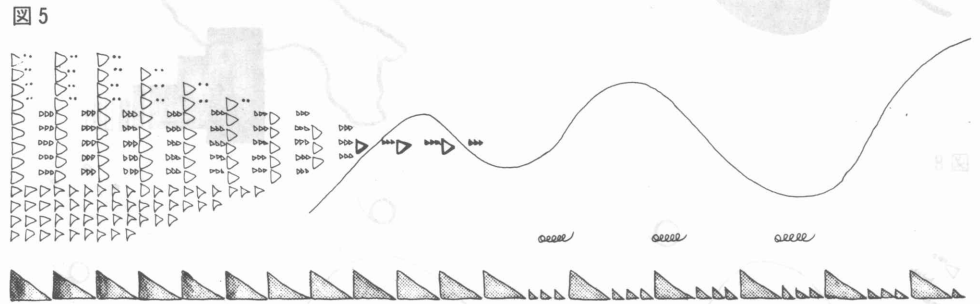


図 6

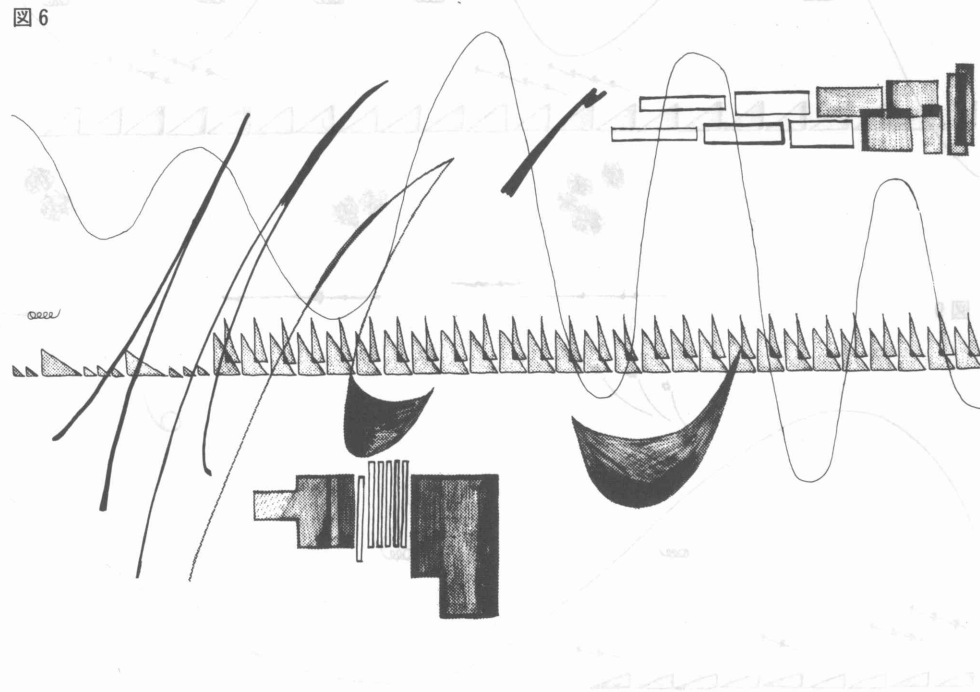


图 7

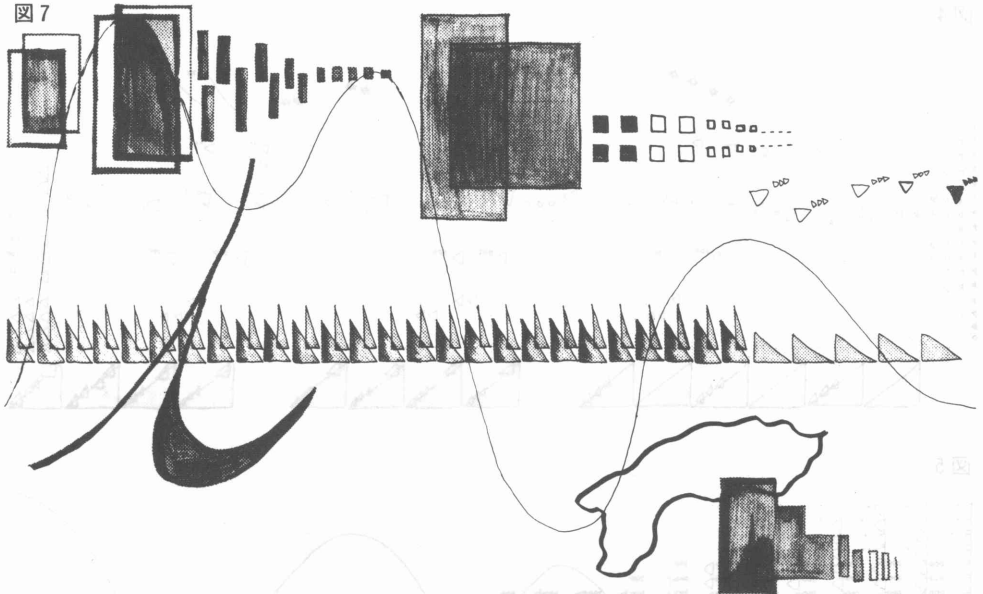


图 8

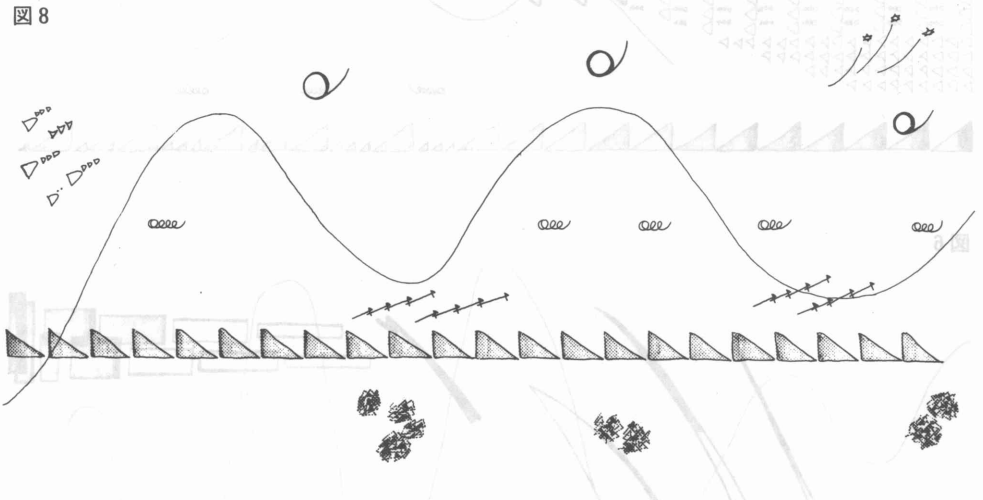
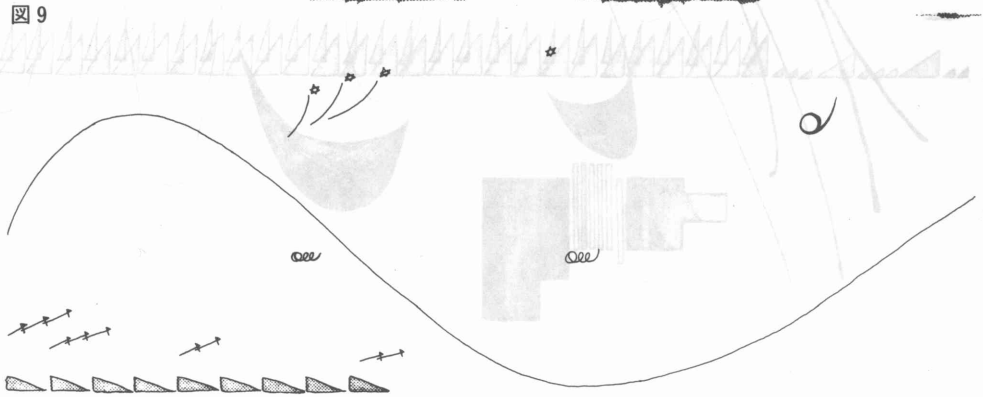


图 9



1 詩とストーリー

この図形楽譜には、短い詩が付いているので、情景の説明と共に記す。

①図1, 2 「朝」

ぼくの住む湖に 朝がもどってきた
 ほら 君たちにも小鳥の声が 聞こえるだろう
 ぼくのみざまし時計が 小鳥の声なんてすてきだ

朝、しーんと静まりかえった湖には、ゆらゆらとゆらいだもやがかかり、波が僅かだがざわめいている。あたりの森の木の葉の間から、キラキラと光る朝日が差しこんでくる。そのうちどこからともなく、チーツ、チッチッチと小鳥の鳴き声が聞こえてくる。だんだん小鳥の数もまし、にぎやかな朝を迎える。木のかげから鳥がはばたく音が聞こえ、コツツン コツツン コツツンときつつきが木をつつく。そして小鳥たちの大合唱がはじまった。

②図3, 4 「昼」

にこにこした太陽が 湖面を通過して ぼくまで照らす
 まぶしすぎて、ひっくり返りそうだ

大きな太陽が森や湖を照らし、小鳥たちの合唱も小さくなったり、森中に響いたり、楽しそうである。そこへ子どもたちが遊びにやってきた。湖はたいへんにぎやかになり、波もざわつく。みんなで「おお プレンネリ」を歌い、おどりだす。

③図5, 6, 7 「夕」

あつ もう太陽があんなところだ
 夕方の湖もすてきなんだよ
 みてごらん 夕日が湖に映って かげろうみたいだろう

子どもたちが帰り、鳥たちも木のかげで休む。夕ぐれどきの湖面は、屋間の疲れをいやすようにゆれている。静かにコロコロと虫の音も聞こえてくる。

とっぜん湖面から「主」があらわれ、湖であれば回る。

君たち 今を見たかい
 ぼくはあいつが 苦手なんだ
 あいつがでてくると 湖はまるで台風なんだ

あらあらしく動き回る主。そのたびにできる不規則な波。大きな渦。静かな湖には不気味な空気がただよう。

④図8, 9 「夜」

さあ ほっとしたところで
 虫たちの音楽会が 始まるんだ
 朝がくるまで なくんだ

あばれ回った主は満足そうに湖に沈む。静けさが戻り、あたりも暗くなる。月の青白い光が湖を照らしている。その静かな輝きにさそわれて、虫たちの音楽会が始まった。

2 図形の説明

- ▲ 湖に打ち寄せる小さな波を表わしている。この波がこの曲の構成上のベースになっていて、進行に大きな役割を果たす。厚紙で作った細長い箱に小豆を入れ、箱の片方を交互に持ち上げた。小さな波は、ジュースの空缶に小豆を入れて振った。
- ～ 湖を取りまく空気を表わしている。おだやかに、もやがかかっている状態のときはゆるや

かに、荒れ狂うときには曲線がくずれる。波と同じく曲の構成上のベースになっている。この音はチャイムを用い、音の揺れる感じをイメージとして扱っている。

/// 太陽が森の木の間とか湖に、キラキラと輝いている様子を表わしている。曲の終わりには月や星の輝きとして出てくる。楽器はグロッケンを用いる。

♪ 小鳥の鳴き声を表わす。図形の数によって小鳥が増えたり減ったりする。色が濃い図形は強く、堅く、高い音である。変形した図形はリズムを表わそうとしている。図4では“おおブレンネリ”のリズムを用いている。楽器はリコーダーのジョイントをはずし、マウスピース部のみで奏す。音程は手のひらや指で塞いだり開いたりして変える。

♩ 木をつつきが木をつついて音。ウッドブロックで奏する。

♪ 鳥のはばたく音で、うちわをバタバタたたいて出す。

次の4つの図形は、湖の主（怪獣・ネッシー）が荒れ狂っている様子を表わしている。

♪ スピーカーにマイクを近づけたときに起こる鋭い雑音（ハウリング）。

♪ シンバルを打つ。

♪ シンバルを床に落して響かせる。

♪ ピアノの低いほうの鍵盤を、手を広げて力強くたたく。

次の5つの図形は虫の鳴き声である。

♪ コロコロリー 木きん

♪ リーン グラスハーモニカ

♪ スイッチオン 木きんの音板を3・4枚たばね、両手のひらでもむ。

♪ ガシャガシャ 大きな貝がらを裏返してすり合わせる。

♪ ジー 洗濯板をギローのようにならす。

III 創作過程

1 ストーリー作り

曲を作るにあたって、まず情景が話し合われた。その結果、美しい場所・楽しい場所という条件で、森の奥の静かな湖という場面設定がなされた。そして変化を持たせるために湖の朝・昼・夕・夜の情景を描くことになり、グループで情景を分担して作業することになった。

朝の班のメモより

「朝、起きたら、いろいろな鳥がチュンチュンと鳴く、ぼくはそれで目がさめた。目ざまし時計が鳥の声だなんてすてきだ。」・「湖に太陽の光が明るく差しました。まだ静かな湖・小鳥がやさしく鳴いて、湖もやさしく輝いています。」・「朝起きてみると、霧があつてよく見えない。その中から小鳥の声。ピーピー、チュンチュン。木をきつつきがたたく音。コンコン。」

昼の班のメモより

「静かな湖に、にぎやかな屋がやってきました。空にはニコニコした太陽が、湖を差しているので、湖は輝いていました。子どもたちはなかよく元気いっぱい遊んで、まわりをにぎやかにしました。」・「キラキラ輝いている。歌っている。子どもたちが来て遊んでいる。湖の輝きが少しずつ消え、子どもたちのさわぎ声だけが聞こえてくる。」

夕の班のメモより

「夕方、あたりが暗くなり、夕日がだんだん沈みかけて湖に映っている。」・「静かな夕方。きれいな夕方。夕方は恐竜がでそうだ。波の音が聞こえる。子どもたちが家に帰っていく。」

・「虫たちが音楽会のしたくをしていたら、大きな恐竜が大声をはりあげあげばれたので、虫たちも動物たちもびっくり。そのうち恐竜は湖に沈んだ。ほっとしたところで、虫たちの音楽会が始まった。」

夜の班のメモより

「虫たちの声が響いている。リーン、リーンとても楽しそう。まるで音楽室のよう。」・「虫たちの音楽会が始まった。いろんな虫が声をそろえて鳴いている。湖も音楽会を聞いて、おどっている。声をそろえて、いちにのさん。リーンリーン、コロコロリー、ジージージー、スイッチョン、楽しそう。」

こんな具合で各班の作業が進んでいった。子どもたちは、自分が湖になったり、鳥になったりして思いをめぐらせ、ふくらませてきた。こんな作業をしているなかで、夕の班から恐竜(ネッシー)が登場したことが、全員の注目をあびた。このようにして、森の1日のストーリーが合作されていった。

2 情景を音で表現する

表現活動も、情景と同じ班割りで行われた。試行錯誤しながらも、始めのうちは具体的な音あつめしかできなかった様子が見られた。例えば、湖の波の音を「バケツに水を入れ、ピチャピチャさせる。」・「ビーチボールに水を入れて振ると、パチャパチャとなる。」というように具体的な描写へと移行していった。「とがった鉛筆で太い木をつついたら、きつつきの音になるんじゃないか。」・「太陽の光が空から地面に差している光景は、タンバリンを振りながらキラキラとおろす。」・「湖がキラキラ光っているところを声でキラキラと歌う。」・「中太鼓の上にカスタネットのこわれたのを置いて太鼓を強くたたくと、魚がはねてるようになるんじゃないか。」といった具合であった。しかし、そのうちに種ぎれになったり、実際にやってみたら音が響かず、とても使いものにならなかつたりして、徐々に抽象的なものを求めるようになっていった。「朝日が木の間からキラキラと差してくる光景や、朝日が湖にあたってキラキラ輝いている情景は、ベルリラがびったし。」といて、ベルリラを強く打ったり、グリッサンドを速くしたり遅くしたりなど工夫を始める。その結果「ベルリラの一番高いソの音がわたし。ファの音が太石さん。ミの音が望月さんというように決めました。そうして3人のやる所を考えました。」・「すず虫はリーン、リーンと鳴くので、すずを使ってみたらとってもすず虫に合ったので、すずにしました。だけど私たちがコオロギをトライアングルでやろうとしたけれど、他の2人が風鈴にしてしまったので、私のトライアングルの音となんにも合いませんでした。」・「キリギリスの鳴き声は鉛筆をたくさん集めて、手でゴシゴシもんだらびったりでした。」・「ももとの楽器より、作った方がおもしろい音がするし、ただたたくんじゃなく、いろいろな所を工夫してたたく。」・「トライアングルを強くたたきすぎるとおかしくなるから、小さくしたり大きくしたり、間をあけてたたくといい。トライアングルをさわってたたいたりすると、かわった音がする。」

このような子どもたちの記録から、自己表現としての音あつめが、周りの人を意識した集団としての工夫へと、試行錯誤を繰り返しながら移行していく過程がわかる。

3 表現の工夫

朝・昼・夕・夜の各班で進めてきた作業を、中間発表して他の班の人たちの意見を聞いてみるようになった。この集団活動は非常に建設的な工夫に富んだ意見がたくさん出ると同時に、自分たちの欠点を反省する良い機会であった。

朝の班に対して

「はじめの音が何の意味かよくわからなかったから、何かわかるように区別した方がよい。」
「一番はじめの鳥の鳴き声がさわやかできれいだった。」・「小鳥の声が大きいところもあるし、小さいところもあるのはいいと思う。」・「キラキラ輝いているんだと思うけど、まだちよっときたない。」

昼の班に対して

「はじめの方は、湖がキラキラ輝いていて、だんだん子どもたちがさわいでいる感じがしてよかった。」・「すごくにぎやかで、おもしろい音を出して遊んでいるように聞こえる。」・「うちわは鳥の羽根の音に似ていていいが、はばたく様子がでていない。」・「うちわをバタバタたっているのがまるで喧嘩しているみたいで、全体の雰囲気合っていない。」・「うちわをバサッと1回やるだけでなく、たいへんだけバサッ、バサッと2回づつリズムをつけてやったほうがよい。もっと大きくした方がいいからじょうずに練習してほしい。」

夕の班に対して

「シンバルの2人の音が、バラバラでごちゃごちゃしている。」・「シンバルの音はうるさいだけでなにも怖くない。鳥たちも皆で怖がっていたほうがよい。」・「スピーカーから出るハウリングは変な音で気持ち悪くてよい。マイクをサッと動かしたり、近づけたり遠ざけたりして音を変えるとよい。」・「みんな一緒にやると、1つ1つの音がわからなくなってしまうから、順番を決めた方がいい。楽譜みたいなのが書けるとよい。」・「シンバルとハウリングだけだと、音が高すぎてちっとも怖くないから、ピアノで低い音の鍵盤を一気にたたいたらどうか。」

夜の班に対して

「いまやっているすず虫の音は短いから、風鈴はすずが始まるまでやって、トライアングルは貝が終わるぐらいまでというように、もっと長くすればいい。」・「音の大きいものの数をふやしたら、小さい音しか出せないものは聞こえなくなってしまうから、音の大きいものはあまり使わないで、小さい音しか出せないものは数をふやせばいい。」・「夕方はにぎやかで怖い感じだったが、波も静かになってほっとした感じがでている。」

このように子どもたちは、音の工夫・奏法の工夫・音の強弱・音のバランスなど、また雰囲気工夫・演出の工夫といった、音響の効果や視覚の上での効果も考え、総合的な表現への試みへと発展させていった。

その他、集団活動の中から、朝・昼・夕・夜の各場面のつなぎの重要性を発見し、時間経過の必要を感じたり、音だけの表現では不安になり、詩を付け加える結果にもなった。

その次の子どもたちの課題は、こうしてできた曲をどんな楽譜にするかであった。演奏するたびに全くちがう流れになってしまったり、自分の出番が明確でないと、イメージが狂ってしまうということで、楽譜の必要性を認識した。

そこで、演奏のタイミングを明確にするために、湖に打ち寄せる波と、湖を取りまく空気の2つの図形をベースとしてまず作り、朝・昼・夕・夜の各班に分かれて図形楽譜を作成し、最終的に組み合わせたものが、前述の図形楽譜である。

IV 図形楽譜の普遍性を知る試み

自らの手で創作し、楽譜を作り、演奏することにより、自己表現及び創造のよろこびを味わったわけであるが、この作品や図形楽譜が第三者の目にはどのように映るのか。実際に普遍性を持つものであるのかを知る必要がある。そこで本校の音楽科専攻の3年生に前述の図形楽譜を渡し、演奏させてみた。学生30名を6名ずつの5グループに分けて、全く説明なしで渡した。はじめに譜面を手にした時はびっくりした様子であったが、図形の面白さに魅かれていくようであった。

1 大学生のストーリーのとらえ方

次に1つのグループの例を示すが、どの班もおおよそそのとらえ方は同じで、大きな違いはない。

「僕は湖に住んでいます。この湖は水が澄んでいて、森に囲まれています。湖の1日は小鳥のさえずりで始まります。そして、太陽の光がさんさんとふりそそぐと、湖はそれはそれは美しく輝きます。かっこうが鳴き、せみも鳴き始め、リスやうさぎや小鹿が、湖の周りをかけ回ります、どこからか子どもたちがハイキングにやってきました。子どもたちの元気な声が森に響き渡ります。その声がだんだん遠のいて森が静かになります。不気味な風が吹き始め、雲が出てきて雨もふり始めました。あいつがやってきたのです。あいつが去った後、湖には平和が戻ってきます。やがて日が暮れ、静かな夜がおとずれました。」

図形楽譜から、このようなストーリーの情景を想像している。各班とも、これと大きな違いはなく、しかも子どもたちが作ったストーリーとも非常によく以ている。

2 図形のとらえ方と音づくり

大学生たちが最も悩んだのは、予想していたとおりであったが、～の図形である。この曲線は、それ自体にあまり意味のあるものではなかった。子どもたちは、朝や夕の、のどかな雰囲気表現するためにチャイムの澄んだ、すきとおった音色が必要だったのである。したがって始めのうちは、チャイムの音の図形を考えていたのだが、何度かチャイムを打っているうちに、音が揺れている感じに気が付き、「湖の上や周りに漂う空気のような」ということになり、完成譜のような大きな曲線となったのである。大学生たちはこの曲線を一種の雰囲気としてはつかんだものの、ほとんどの班は具体的に風の音や波の音としてとらえていた。楽器としては、リコーダーの歌口部分に、すこし離れたところから息を吹きつけたり、手桶に水を入れ、手でかき回したピチャピチャした音をアンプで拡声したりしていた。また、ある班はそよ風としてとらえ、ピアノでアルペジオをコード進行させて、森の雰囲気を出そうとしていた。

/// の図は全ての班が小鳥のさえずりとしてとらえたようである。しかも4つの班が、鉄きんでグリッサンド奏をしていた。しかし子どもたちは鉄きんで同じ音を用いてはいたが、キラキラとした輝きを描写していた。

▲ の図はいろいろな解釈があったが、ある班は、湖岸に打ち寄せる波と考え、ダンボール箱に小豆を入れて振り、小学生と同じ波の音を作っていた。なお、この班は～をそよ風と考え、ピアノでアルペジオを弾き、/// を小鳥の鳴き声とし、鉄きんで奏すなど、小学生の演奏に非常に似ていた。一方、他の班では、鼓動としてとらえ、シンセサイザーで心臓の音を作ったり、指揮棒のかわりにハサミを持ち、▲ の図でチャキッ、チャキッと音を出しながら合図していた。また、マンドリンできれいな落ち着いた音をトレモロで出している班もあった。どの班も～と

共にこの曲の進行上重要なかわりを持たせている。これは作品の意図が、図形楽譜を通して十分に伝わっていると考えられることができる。

▼ の図はすべての班が小鳥の鳴き声にとらえた。楽器もリコーダーの歌口部で吹くのも共通していた。その他鳥笛・水笛・口笛やトライアングル・すず等も用いている。

◎ の図は子どもたちの意図したとおり、小鳥の羽音とし、うちわとほうきをすり合せた音を用いている班があったのは驚きであった。

▷ の図が、ある曲のリズムを表わしているというヒントを与えたら、「おお プレンネリ」の曲であることがわかってしまった。そこで各班とも打楽器アンサンブルが行われた。ピアノやウッドブロック、テンブルブロックでメロディーを奏した班もあったし、リズムだけの班もあった。そんななかで、全ての班が身振り、手振りの動きをつけ身体表現を伴っていた。なお「おお プレンネリ」のメロディーを用いた3つの班は、人間の子どもたちが森の湖に遊びにきた情景を想像していた。

湖の主として用いられた図形は、大学生たちがだいぶ悩んでいた部分で、いろいろ工夫のあとが見られた。すべての班が、嵐・雷鳴等が荒れ狂っている情景を想像していたが、怪獣とかネッシーという言葉はついに聞けなかった。作品の一番盛り上がりにあたる部分なので、音づくりの面でもよく工夫している。たとえば、掃除機のスイッチを入れたままホースを振り回す。布や新聞紙を引きさく。紙袋を膨らませておいて、手のひらでたたく。セルロイドの下じきの両はしを持ってあおる。電気ピアノにトレモロをいっぱいかけ、両手で鍵盤をたたく。オートバイのエンジンの音・水道で手を洗う音・ラジオのノイズ・目ざまし時計・皮のムチ等が工夫されていた。

このように、大学生の図形楽譜のとらえ方は、ストーリーのとらえ方が非常によく似ていたと同じように、用いられた楽器がたいへん多く共通していたこと、及び、楽器は違っても音色や表情は非常によく似ていることがわかった。

なお、子どもたちは全曲を演奏するのに6分から7分を要していたが、大学生の発表の時の所要時間は、5分30秒・5分14秒・3分55秒・4分25秒・4分22秒であった。子どもたちと比べると短めであるが、大学生同志はだいたい同じと考えられる。

3 学生の感想

グループでの演奏発表をし、お互いの班の演奏を聞いたあとで、大学生たちの感想を集めてみた。

- ・譜面を見て音楽の構成を考えるのは比較的容易だった。ところどころに書いてある情景の説明をたよりに、ストーリーを作った。

- ・全体の演奏を聞いて、みんなが似たようなイメージで音楽を作っていたことがわかった。今回は、楽譜が渡されて、それからイメージに合う音を置いていったから、楽譜から得られる視覚的なものがすごく音楽の構成に影響していると思う。

- ・だいたい楽譜のとらえ方はみんな似たような感じだと思ったが、発想の違いでいろいろな表現のしかたがあるものだと驚いた。

- ・楽譜が抽象的だった為か、今ひとつはつきりしたものがつかめなかった。だから終わった時、何故か「これでいいのかな」という気持ちが残った。

- ・いつも音符がならんでいる楽譜を見てその通りに演奏するのがあたりまえになっているときに、このような創造的な音楽を演奏することができてとても楽しかったです。

・音符が書けなくても音楽が表現できることに感心しました。かえって音符などないほうが、演奏者の個性がでると思えました。子どもたちは、私たち音楽科生よりもずっと音楽を体で感じていると思います。私たちは頭で音楽をコピーしようとしているだけだと感じました。また、個人個人によって、音楽の表現・解釈が異なることを強く感じました。

・最初、この楽譜を与えられた時、見なれぬ妙な形の連続・鉛筆で書きなぐったような絵に、この図面から合奏ができるなんて想像もつかなかった。また、これが子どもが作ったお話しをもとに自分たちで作曲した楽譜であり、実際に子どもがこの曲の合奏を行ったと聞き、子どもたちの創造力の豊かさに驚いた。

・音の発見においては、実際に手足を動かし、たたいて、吹いてみなければ曲のイメージに合った音というものは生まれてこないと思う。どうしても頭で考え、既成の楽器の音のみが念頭にあり、範囲がせまかったのではなかったかと思う。それが私たちの生活の中での行動範囲に関係してくることだと思う。

・こんな日常的な道具から音楽ができあがること、またそれは既成の楽器以上に音の広がりやイメージを作りあげることができるということがわかった。このように音楽というものを自由な発想でつくっていくなら、人々がもっと音楽を身近なものとしてとらえていけるのではないだろうか。

これらの感想から、大学生たちの、未経験の音楽創造へのアプローチに対する驚きや苦勞・喜び・発見等が感じられる。と同時に、子どもの音楽創造が大学生に対しても決して幼稚に映っていないし、子どもたちの創造性の豊かさには脱帽の姿勢も感じられる。

4 学生の演奏をきいて

学生の演奏の全体像としては、既成の観念からぬけ出しきれなかったことが特筆できる。自分たちが学び、身につけてきた音程感・旋律感・音色感・和声感等の音楽的な蓄積から、ぬけ出すことができなかつたためである。自分たちの思いつきのなさ・創造性のなさ・感覚的な判断力のなさ等に愕然としながら、自己表現においても不安をぬぐいさることができないのである。そのため、ピアノ等既成の楽器に対する依存度が高くなり、その結果として、自信のない演奏として表われたり、演奏時間が短くなってしまったりする。これらが、学生の演奏から音楽的な訴えが乏しくなる原因と考えられる。

5 図形楽譜の可能性

学生の図形楽譜のとらえ方から、次のことがいえる。

- ・ストーリーの設定が、各班ともオリジナルに非常によく似ていた。
- ・図形によって、用いられる楽器が共通していた。
- ・音の大きさ・強さ・音色等、音の表情が図形によって共通していた。

したがって、細かい所での相違点は多々あるものの、全体としては子どもたちの演奏も、大学生の各班の演奏も、非常によく似ていたといえる。

理由として考えられることは

- 1 詩がついていたこと
- 2 図形の持つ視覚的イメージ
- 3 図形の構成（楽譜能力）

があげられる。詩のついていたことが、情景を容易に想像させる大きな要因となったが、上記の3つが、お互いに作用し合い、普遍性を持った図形楽譜になっていることができる。

V おわりに

図形楽譜を用いた創作・演奏を試みて、子どもたちでさえも既成の観念からぬけ出すには、思ったほど容易なことではないことがわかった。しかし、試行錯誤しながら、日常のあそびで使っている道具を持ち出したり、子どものもちまへの好奇心から、手あたりしだいにたたいてみたり、あそびのなかでいたずらでもするように音を発見していく。また、そうしている間にいままで以上に耳を敏感に働かせ、われさきにと自己表現の機会をうかがっているようである。自分で意図した音あつめや、音の連結・音の積み重ね、あるいは演奏におけるタイミングや、音色が意図したとおりにできたかどうか。など、音に対してうるさくなってくるのである。このような個人としての体験は、さらにグループ活動のなかでより深められ、音楽創造への原動力となっていくのである。

本論は、先に、音楽創造教育が、音楽的基礎能力の前で行き詰まってしまうことを述べたが、音楽的基礎能力を否定するものではない。この音楽創造への原動力をもとに創造された音体系（音楽）をより普遍性の高いものにするためにも、そして従来の音楽を築いてきた歴史・先人の感覚を理解するためにも、またより音楽芸術を高め深めるためにも、音楽的基礎能力は欠くことのできないものと考えているのである。

本来、音楽教育のなかでは、活発な創造活動が行われるべきである。しかし、音楽創造に音楽的基礎能力が必要である以上、だれでもがフルに創造性を発揮するのは不可能である。そういう子どもたちに、一時的ではあるものの、音楽的基礎能力から全面的に解放した試みを行い、音楽を創造する喜びを味わわせ、その原動力を養ったということに関して、音楽教育・創造教育の一環としての意味を持つものであると考える。

今後は、このように音楽的創造性が芽生えてきた子どもたちが、音楽的基礎能力の必要性を感じ、自ら音楽的基礎能力を身につけ、高めていこうとする学習過程を考えることが課題である。

注

- 1) 松下允彦：音楽教育とあそびに関する一考察 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇 No. 12 1980 p.81
- 2) 松下允彦：音楽教育における創造性と創作についての一考察 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇 No. 13 1982 p.101
- 3) 松下允彦・須貝静直：ロザサミによる音楽鑑賞指導法 日本音楽教育学会第8号 p.20

参考文献

- ・マリー・シェイファー著 高橋悠治訳 教室の扉 全音楽譜出版
- ・ジョン・ペインター、ピーター・アストン共著 山本文茂 坪能申紀子 橋都みどり共訳 音楽の語るもの 音楽の友社